

機関番号：37201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 年度 ～2010 年度

課題番号：20510260

研究課題名（和文） イギリスにおける女性のアカデミック・プロフェッションに関する歴史的研究

研究課題名（英文） A Historical Study on Women Academics in England

研究代表者

香川 せつ子（KAGAWA SETSUKO）

西九州大学・子ども学部・教授

研究者番号：00185711

研究成果の概要（和文）：本研究では、19 世紀末から 20 世紀初頭のイギリスを対象に、女性大学教員の量的動向や属性、専攻分野等を検討し、教育研究スタッフへの女性の参入の過程と阻害要因を明らかにした。19 世紀末まで女性の大学教員の職場は女性カレッジに集中し、教育研究環境や地位において不利な条件下に置かれながらも、自然科学等の新興学問分野で独自の業績を残したことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：In this study, the early development of female academic profession at English universities is examined. Analyzing the number, social origin, and research field of them, it is pointed out that the early women academics were accepted mainly in women's colleges, and were suffered from poor research environment, but they played important role in newly developed study fields in natural science.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：教育史、ジェンダー史

科研費の分科・細目：複合領域、ジェンダー、ジェンダー

キーワード：イギリス、女性、大学、職業、科学

1. 研究開始当初の背景

（1）現在、大学での男女共同参画を推進する視点から、女性研究者への支援が国際的課題となっている。近年の OECD 調査では、日本の大学における女性教員の比率は 34 カ国中最下位の 14% であり、有効な対策が待たれている。他方、西欧諸国は概ね 20% から 30% であり、男女のアンバランスは解消されていない。しかし、女性の高等教育の 100 年余にわたる歴史のなかで生じた障壁や軌轍を乗り越えて、各国の事情に応じた支援策が一定の効果を挙げ、ケンブリッジ大学やハ

ーバート大学等の一流大学で女性が学長に選出されるなど、男女共同参画が進展している。

（2）19 世紀後半に女性に門戸を開放し、その後数十年間に女子学生数が急増したイギリスの大学でも、女性教員の受け入れに関しては、第一次世界大戦後に至るまで強硬な反対が続いた。女性が男性教員と対等な立場で教育研究をすることに対しての社会文化的な抵抗が根強く存在したからである。イギリスにおける女性のアカデミック・プロフェッションへの進出の歴史的経緯を検討するこ

とは、高等教育におけるジェンダーバイアスの実態と要因の究明にとって不可欠な作業であり、翻って日本の大学における男女共同参画の方策を検討する際の参照例となる。

(3) 大学における女性研究者の地位や高等教育におけるジェンダーの非対称を主題とした研究は、社会学や科学史の分野で徐々に進捗しているが決して多くはない。また女性のアカデミック・プロフェッションへの進出に関する歴史的研究は、日本でもイギリスでもさらに蓄積が少ない。しかし、イギリス女子教育史研究の第一人者であるキャロル・ダイハウスは1995年の著書『性差別は存在しない？イギリスの大学における女性 1870年－1990年』の一部で当該時期の女性大学人について論じており、またフェルナンダ・ペロンが1991年にオックスフォード大学に提出した未公開の博士学位論文「オックスフォード、ケンブリッジ、ロンドンの各大学における女性教員 1870年－1930年」も存在する。これらの先行研究を手がかりに、近年のジェンダー史研究の諸成果を援用することで、新たな知見を獲得したいと考えた。

2. 研究の目的

(1) 19世紀末から20世紀初頭のイギリスの大学を対象に、教育研究職の女性への開放の過程、推進派と反対派の対立と葛藤の構図を明らかにすることにより、高等教育におけるジェンダーの境界線の変容を究明する。本研究では、とくに中世以降の伝統を有し、長期間にわたって「独身男性の社会」であったオックスフォード大学とケンブリッジ大学に焦点を絞って検討する。この結果を19世紀に設立されたロンドン大学等の市民大学の場合と比較検討することで、イギリス大学全体の動向の把握へとつなげる。

(2) 初期の女性大学教員の社会的出自や教育歴、専攻分野における業績や大学内の地位等を分析することを通して、女性大学教員のキャリア形成の過程を検証する。高等教育修了後に中等学校教員となった女性、および医師職に進出した女性とは区別される、アカデミック・プロフェッションへの参入に特徴的な傾向を把握する。

3. 研究の方法

(1) 当該テーマに関する先行研究が少ないことから、第一次資料の収集を目的にイギリスでの文献調査を実施した。女性の大学教員の受入れをめぐる展開された大学内の論議を資料より把握し争点を整理した。

(2) 初期の女性大学教員のキャリア形成の過程と特徴を把握するために、女子カレッジの卒業生名簿、「イギリス国民辞典」デジタル版から抽出したデータを分析し、類型化を試みた。

(3) 女性のアカデミズムへの受け入れに対する態度は、学問領域によっても差異があると考えられることから、著名な女性研究者の自伝や伝記を収集してその足跡を辿るとともに、科学史、経済史等の学会誌に掲載された学術論文を含む広範な資料を渉猟した。

4. 研究成果

(1) 女性大学教員の量的動向

19世紀末まで女性の大学教員の職場は、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学とロンドン大学の女子カレッジに集中していた。その数は、1883年度に17人、1893年度に51人、1903年度に87人、1914年度に147人というように着実に増加している。しかし、オックスブリッジの旧大学では、女性がユニヴァーシティ所属の教員となり男子学生の指導にあたることは許可されず、ケンブリッジ大学での女性教員採用は1926年まで持ち越された。他方、19世紀設立の新興市民大学は比較的寛容であり、ロンドン大学では1898年、マンチェスター大学では1907年に最初の女性の常勤教員が誕生した。

イングランドの大学全体における女性大学教員の総数を正確に把握するのは困難であり、先行研究間で若干の齟齬があるが、1930年までにおよそ550人程度に達したとみられる。男性を含めた全教員数の14%程度であり、職位でみれば教授等の上級職にある者は全女性教員のうちの10%程度であった。これらの比率は1980年代までほとんど変化しておらず、女性の職場進出の障壁となった「ガラスの天井」は、大学においても長期にわたって根強く存在していたことが明らかである。

(2) 女性大学教員の属性

初期の大学教員の属性に関する全般的な状況は、フェルナンダ・ペロンが1870年から1930年までの時期にイングランドの大学に所属した女性教員をサンプルに行った研究から知ることができる。出身階層からみれば父親が専門職に従事する家庭に育った者が圧倒的多数であり、1884年では80%以上を占めた。その後次第に実業家層が増加し、20世紀初頭に10%前後を占めたが、専門職家庭出身の優位は変化しなかった。

入学前の学習歴は1890年頃を境に変化しており、それ以前では家庭での個人教育や小規模校出身者が多かったのに対し、90年代以降は通学制女子中等学校出身者が急増し、20世紀初頭に過半数に達した。出身大学別では、オックスフォード大学とケンブリッジ大学で自校出身者が圧倒的であるのに対し、ロンドン大学では自校出身は半数以下であり、広範な大学から教員を受け入れている。

専攻分野別では、古典学、近代語、文学な

どの人文学分野が最も多く、判明した範囲内では全期間を通して 60%以上を占めたとされる。数学、化学等の自然科学分野、植物学、動物学等の生物科学分野がこれに続き、両者を合わせれば 30~40%近い。歴史学や経済学等の自然科学分野は 20 世紀に入って増加した。

以上のように多面的な考察を経て、初期の女性大学教員の一般的プロフィールを、中流階級専門職家庭の出自、近代的女子中等学校からオックスブリッジの女性カレッジへと進学した者であり、古典学や近代語、文学等の専攻者であると描くことができる。

(3) 女性カレッジ教員の役割

当該時期において、大学修了後に勉学の継続を希望する女性に開かれた道は、母校の教育スタッフとして後輩の指導にあたることだった。ケンブリッジ大学の最初の女性カレッジであるガートン・カレッジの名簿から、教員の履歴や属性を分析したところ、1873 年から 1899 年までの新規採用教員 20 名中 19 名までが同カレッジ出身者であった。女性カレッジの側でも、ケンブリッジ大学の最終試験にあたるトライポスで優秀な成績を収めた卒業生を教員として雇用することは、高等教育修了女性のパイオニアとしてのロール・モデルを提供すると同時に、独自の校風や学生文化の醸成に役立ったと考えられる。

彼女らの任用時の職位は寄宿舎つき講師であり、大学所属の男性教授を補佐して、トライポスで合格した科目を後輩の女子学生に指導した。しかし、その地位や待遇は概して不安定であり、同カレッジで数年勤務した後には女子中等学校教師として転出する者や、結婚を機会に退職する者も多数存在している。20 世紀に入ると、より専門的な研究を求めて国内外の大学に進学し、大学教員としてのキャリアを積む者が出現した。女性の高等教育修了者を受け入れる職場の開拓が進捗しないなかで、女性カレッジは、アカデミック・プロフェッションへの進出のステップボードとして機能したと指摘しうる。

(4) 全英女性大学教員連合の結成

女性カレッジ以外の場合、女性が大学教員となる道は容易には開けず、前述したように、ロンドン大学等の市民大学では 1890 年代、オックスブリッジでは 1920 年代にはじめて女性の常勤雇用が実現した。女性の採用形態の大半は実験助手、助講師等の補助教員や非常勤の嘱託教員であり、不安定な地位と慢性的な研究資金不足に苦しんでいた。

このような状況を打開するために、女性大学教員による職場を超えた連携と協働をめざして、1910 年に、アイダ・スメドリー（マンチェスター大学化学科助講師）を中心に、

全英女性大学教員連合が発足した。同連合の資料によれば、結成時の目標は次の 4 点である。

- ① 女性大学人の団結と組織的行動の拡大、
- ② 女性の独立した研究を奨励すること、
- ③ 異なる大学に属する女性教員同士の意思疎通と共同を促進すること、
- ④ 地方自治体や公共の生活における女性の利益を擁護すること。

劣悪な研究環境と低報酬のなかで孤立しがちな女性大学教員の連携を通して、地位向上と研究条件の改善を実現しようとする同連合の試みは全国に広がり、1920 年代には国際女性大学人連合の結成に至った。

この頃には、大学の教育研究職が、中等学校教員、医師、看護職と同様に、高等教育を経験した女性の専門職として社会的にも認知されるようになっていた。女性大学人の協働活動は、第一次世界大戦後の国際的な平和運動や女性参政権運動の展開にも貢献し、専門職集団としての社会的影響力を徐々に発揮することになる。

(5) 学問分野別にみた女性教員

初期の女性大学教員の専攻分野の時系列における傾向性、各分野での研究業績、大学内での地位等を分析することで、女性教員の学問的志向性だけでなく、学問分野間の女性受け入れに関する態度や方針の差異が明らかとなる。そこで、ガートンとニューナムという二つの女性カレッジを有するケンブリッジ大学を事例に、学問分野別の動向を検討した。

① 人文学分野・・・初期の女性教員が最も多く専攻したのは人文学系であるが、そこでの代表的学問は古典学である。古典学は、大学の伝統を体現する科目として女性のトライポス受験者を多数惹きつけたが、入学前のラテン語学習の不足により、男子学生に比較して成績が悪く、女性にとってハードルの高い学問であった。ニューナム・カレッジの研究フェロー、ジェイン・ハリソンはエジプト学で異例の業績を残したが、大多数の女性教員は寄宿舎講師の地位にとどまっており、女性の研究は認められにくかった。

② 自然科学・・・19 世紀に発展した自然科学は当時の女性が比較的参入しやすい分野であり、1848 年に創設された自然科学トライポスは女性の受験者を集めた。マクラウドとモーリーの研究によれば、1882 年から 1920 年までに自然科学トライポスに合格した女性の 11.7%が大学の教育研究スタッフとなっている。これは自然科学トライポスの女子合格者の 5%が、大学教師を父親にもっていることと関係があり、父親の影響を受けて自然科学を専攻した娘たちが大学教育を経て、父親と同様の道へ進むというケースと推測

される。また、女子中等学校と女性カレッジとのリンクも重要であり、例えばパーミンガムの基金立女子学校はニューナム出身者を自然科学教師に雇用することで、高レベルの科学教育を提供し、優秀な卒業生をニューナムへとリクルートした。

自然科学系のなかでも、女性研究者に対する受容度は学問分野により異なった。数学、物理学等の伝統ある学問分野は女性の受け入れに難色を示し、衛生学、生化学等この時期に急成長した学問分野は積極的に女性を研究スタッフに迎え入れた。1914年にケンブリッジ大学で発足した生化学学科では、初代フレデリック・ホプキンスのもと男女同数の研究スタッフがいたという。その一人ニューナム出身のマージョリ・スティーブンソンは、バクテリアの研究で業績を挙げ、女性で最初に王立協会フェローとなった。その他、衛生学のマリオン・グリーンウッドや生物学のミュリエル・ウェルデル等、優れた業績を残す女性研究者が自然科学分野で輩出し、アカデミック・プロフェッションにおける女性の地位確立に貢献した。

③社会科学・・・社会科学トライポスの成立は自然科学と同年の1848年であり、大学改革派の旗手であり、ニューナム・カレッジ創立の中心人物でもあったヘンリ・シジウィックは女子学生の政治経済学受講を奨励した。しかし、アルフレッド・マーシャルが女性の受講を奨励しつつも、女性を教員として登用することには反対したように、「若きドン」たちの女性の社会科学研究への参入に対する態度はアンビバレントな要素を含んでいた。ガートン・カレッジで歴史学を専攻した女子学生の多くは、1985年に創設されたロンドン・スクール・オブ・エコノミクスへの進学を選び、新興の社会経済史分野でアイリーン・パワー等第一次世界大戦後に活躍する研究者を誕生させた。しかし、20世紀中葉以降の展開において、女性研究者の発言の場はむしろ狭められ、第二次世界大戦後から1970年代まで、社会科学は経済の担い手である「男性向けの」学問という様相を呈した。

(6) まとめと今後の展望

以上の(1)～(5)の考察を通して、当該時期における女性のアカデミック・プロフェッションに関して次のことを指摘できる。

まず第1に、女性が教員として大学に参入し、アカデミック・プロフェッションの一角を形成していくうえで不可欠な役割を果たしたのは、オックスブリッジやロンドン大学の女性カレッジであった。とくに女性高等教育のパイオニアであるエミリー・デイヴィスによって創設されたガートン・カレッジは、母校出身者を教員として雇用することにより、女性の専門職開拓という観点からも歴史

的役割を果たした。ガートン・カレッジ卒業後に、ロンドン大学や海外の大学で学位を取得し研究者となった女性は多数存在する。他方、ニューナム・カレッジは自然科学分野で活躍する女性研究者を多数輩出している点が注目される。その要となったのは、女子中等学校及びケンブリッジ大学の男性教員との連携であった。共学の大学における女性教員の雇用が、伝統的な男女の領域分離観や固定的能力観、女性の侵入に伴うステータスの低下や既得権益の損失への恐れなどのために遅延されるなかで、女性カレッジはその周縁的性格のゆえに、女性教員受入れに積極的であったのである。

第2に、女性の大学教員の地位についてみれば、1930年代に教授等の上級職にある者は全女性教員のうちの10%程度であり、90%は下級職に集中していた。その大半は、助手等の補助的教員か非常勤嘱託教員であり、研究の継続が困難な状況下におかれていた。こうした大学内のジェンダー不均衡は、程度の差はあれ、イギリスでも日本でも、現在に至るまで解消されていない。良好な研究環境と地位に恵まれた者は研究成果を出しやすく、その成果が注目されやすい。その成果も高い評価を受けて、たくさんの研究資金獲得へとつながるといふ好循環を繰り返す。他方で、低い地位と劣悪な研究環境にある者は研究成果を上げることが困難であり、成果を出しても注目されず評価されにくいいため、研究資金には常に事欠く、という悪循環に陥る。女性のアカデミック・プロフェッションの歴史は、こうした負の連鎖の典型的な一例といえる。

第3は、負の連鎖の切断にかけた女性研究者のエネルギーとその受け皿についてである。女性が男性と対等な知力を有することを証明する上で、大学の試験制度は有効であり、多くの女性は男性と共通の試験に好成績で合格することを突破口にアカデミック・プロフェッションへと参入した。20世紀初頭においてその受け皿となって発展したのは自然科学である。自然科学は、業績を測定する客観的基準が明確であるために、性差よりも能力による評価がされやすい性質をもっていた。さらに新興の学問であるために男性学生を引き付ける力に欠けていた。しかし実際場面では、実験の準備や記録、統計処理などを担当する補助的人材を必要とした。自然科学分野、とりわけ生化学や衛生学が女性を進んで活用したのはこれらの理由による。

他方、女性にとっては成果の検証がされやすく、学問的な権威よりも実力が重視され、しかも人材の手薄な自然科学系学問は、好ましい専攻分野だった。この分野を専攻した女性は数のうえでは人文学系に劣ったが、進歩的な男性科学者と共同研究を進めた女性のなかから著名な科学者が輩出した。また女性

大学教員連合の立ち上げなど、女性大学教員の協働と連携を図る活動や、参政権運動や平和運動などの社会的活動においても、自然科学系の女性研究者が牽引的な役割を果たしている。

19世紀から20世紀にかけてのイギリスの女性のアカデミック・プロフェッションに関して、以上のような特徴を指摘しうる。この時期を第1期として、歴史的な発展を俯瞰すれば、第二次大戦以後の女性研究者数の停滞期を第2期、第二波フェミニズムと女性学の成立を転換点とした1970年代から現在までを第3期と区分することができるだろう。第2期以降の研究の進展が望まれる。「学問と女性」「科学と女性」を主題とする歴史的研究は、各学問分野での個別的な研究もいまだ少ない状況である。ジェンダー史、大学史、知識社会学等の手法と研究成果を結合させて、より緻密な検討を重ねることが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①香川せつ子 イギリスの大学における女性大学教員の初期の動向—1880年代から1920年代までのケンブリッジ大学を中心に—、西九州大学子ども学部紀要、査読有、第2号、2011年、pp.55-67

②香川せつ子、イギリスにおける女性のアカデミック・プロフェッションの生成と展開—1870年代から1930年代までを中心に—、西九州大学子ども学部紀要、査読有、第1号、2010、pp.37-48

[学会発表] (計1件)

①香川せつ子、イギリスにおける女性のアカデミック・プロフェッション 1880-1930、大学史セミナー、2009年12月6日、東北大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者 (単独)

香川せつ子 (KAGAWA SETSUKO)
西九州大学・子ども学部・教授
研究者番号：00185711